

通信制で学び直す

—長岡英智高校での公文式導入—

学校法人英智学院・長岡英智高等学校は新潟県長岡市にある。JR上越線の長岡駅から一駅電車に乗り、宮内駅で降りた。遠くに見える山の姿が美しく、空気が澄みきっている。宮内駅から高校の宮内本校まで徒歩で数分の距離だ。周囲は保育園や小中学校などが集まる文教地区である。

不登校経験者・ 中退生徒のために

高校は2006年に開校した通学タイプ
の通信制で、スローガンは「ようきた英智、
めがせ卒業」である。「ようきた」は親しみ
をこめた呼びかけで、生徒たちを歓迎する
気持ちがかめられている。というのは、高



校は中学卒業後の新入学の生徒はむろんだが、高校に在籍中の生徒の転入学、高校中退生徒の編入学、また中卒後、高校に進学しなかった生徒の新入学と、さまざまな背景を持った生徒たちを広く受け入れているからだ。

文部科学省の調査によると2015年度中に年間30日以上欠席した不登校の小中学生は12万6千人を超え、欠席期間は長期化の傾向にあるという。長岡英智高校は、いじめや家庭の事情などが理由で不登校だった生徒たちの貴重な受け皿になっているといえるだろう。

高校が公文式学習の算数・数学を取り入れたのは2016年4月だ。以前に、同校

の先生がある会議の場で、香川県にある通信制高校が公文式を導入した経験談を聞いた。その効果の高さを知り、さっそく校内で学び直しの授業として行われている「ベータシックススキル」を導入することを決めた。2クラスの1年生39名全員が対象で、週に2回、3年間継続する。

公文式学習が行われる授業を見学させていただいた。驚いたのは、授業前の生徒たちの行動だ。開始のチャイムが鳴る前から準備を始めている。職員室から公文のプリントを教室に運び込み、さらに採点の先生の机と椅子を教室の前に移動させる。生徒たちの前向きな姿勢は、そのまま公文式に取り組み強い意欲を示しているのだろう。生徒たちは、チャイムの鳴る前から教材を解き始める。授業が始まると、私語が全く聞こえない。仕上げたプリントを提出するために教室の前進む生徒の足音が響くだけだ。生徒からは、「プリントを出しに行く時間さえ惜しい」と言う声が聞かれた。ほんのわずかでも公文の問題を解いていたのだ。

公文式導入が生徒の自信喚起に

は、好きな小説などを読んで過ごしたという。高校で公文式を始めて、「授業に出ていなかったのだからいいことが多いに違いない」と思っていました。実際に始めると「私にもできる」という自信がわいてきました」と話した。さらに人とのコミュニケーションが苦手だったけれど、公文で自信がついてくるにつれ、それも克服できるようになった。「先日、先輩に思い切って挨拶したら、挨拶を返してくれたのでうれしかったです」と打ち明ける。

1年生の結城君は、中学生の時に外国から日本に来た。姉もこの高校に通う。日本語はまだ完ぺきではないが、公文式に熱心に取り組む。終了のチャイムが鳴っても、プリントから顔を上げない打ち込みようだった。「公文は最初は大丈夫だったけれど、だんだん難しくなってきたので、がんばっています。計算をするのは面白いです」と笑う。将来はシェフになって、いろいろな料理に挑戦したい。またバスケットボール部に属していて、先日は福井県で行われた北信越大会で優勝を果たしている。「公文を頑張るのは自分の未来のため。たくさん勉強して夢をかなえたい」とまた笑顔を見せた。

同じ1年生の佐藤さんは、中学校の時に不登校だった。久しぶりに学校に行っても、授業内容が進んでいて、わからないことばかりだった。すると、さらに足が学校から遠のいてしまった。自宅にいるとき

さらに佐藤さんは友人とバンドを作ってベースを練習している。「あとはもう自分が頑張るだけです。先生、友だち、両親などがよくしてくれるので、期待に応えたいです」と力強く結んだのだった。

高校では、父母の公文式学習への理解を深める工夫をしている。三者面談のときには通信簿を手渡ししながら話をするが、その機会に公文式学習の成果を示す。生徒が仕上げた600枚から800枚ほどのプリントを見せると、父母はボリュームに圧倒され、生徒たちの頑張りに胸を打たれると

いう。

数学担当の教務部長、今井基也先生は公文式の指導に当たる。「公文式では学力という見える力がつくだけではなく、集中力や自己管理能力もアップすることを実感しています。また生徒は公文の時間には普段の授業では見られない顔を見せるので、これまでと違ったコミュニケーションが取れ、生徒への理解が進みます」と話す。副校長の岩下隆志先生は、「生徒の基礎学力を向上させるのに良い方法はないかと探していた時、公文式を導入して高い効果を上げた例を知り、うちでも取り組むようになりました。生徒は学力面で幅が広いので、一人一人に合ったところからスタートする公文式はぴったりだと感じます」と述べた。坂上隆校長先生は話す。「公文式学習は今年の春に始めたばかりです。平均よりもはるかに早いスピードで進む生徒が多いと聞き、誇らしく思っています。数学の学力の安定は、進学にも就職にも良い影響を与えらるに違いありません。今後の成果に大いに期待しています」。(取材・文/多賀幹子)